

第7回 自律移動支援プロジェクト推進委員会

議事概要

I 日 時：平成20年3月26日（水） 10:00～12:00

II 場 所：KKR ホテル東京 10F 瑞宝

III 議事次第

1. 開 会

2. 挨拶

3. 議 事

(1) 自律移動支援プロジェクトの実施状況について

(2) 各地の実証実験の結果報告について

(3) サービスWGの検討結果について

(4) 技術検討WGの検討結果について

(5) 実証実験及び民間公募の実施に当たって

(6) 質疑

4. 閉 会

IV 発言要旨：

■谷口技監挨拶

- ・これまで自律移動支援プロジェクトは、全国各地での実証実験を通じて技術的な検証を行うとともに、様々な利用者へ実験へ参加をしてもらい、利用者のニーズ把握などを進めてきた。
- ・これらの成果を踏まえ、プロジェクトの着手後5年目となる平成20年度については、行政と民間が連携し、定常的なサービス提供を目指した実証実験を進めていきたい。

■坂村委員長挨拶

- ・我が国は現在多くの問題に直面している。
- ・より一層の社会の効率化に向けた参加型社会の実現のための新しい国家インフラとしての情報基盤が必要。インターネットも研究開発から社会インフラになるまでに40年ほどかかっている。自律移動支援プロジェクトは世界に対して我が国が提案できる新しいインフラである。実現化に向けて議論していきたい。

■議 事

【大石顧問】

- ・少子高齢化で閉塞感が漂う中、数少ない明るいメッセージが自律移動支援プロジェクトである。委員会の議論が深まり、かつ広がりを持っていると思っており、関係者に感謝する。

- ・平成 21 年度には定常的サービスを行う、つまり社会に実装されるということは喜ばしいことである。
- ・すべての人に普遍的に移動しやすいようにするユニバーサルなサービスを進めていくため、実証実験の期間の長さ、参加者の数や属性の広がりをもっと広くあることが重要である。
- ・プロジェクトの当初にはピクトの標準化に向けた議論があったと思う。情報提供の方法としてこの検討も重要であるとする。

【川嶋委員】

- ・これまでの検討でだいぶ具体的になってきたという印象を持っている。
- ・歩行空間ネットワークデータについて、データベースの作り方により、反応時間やメンテナンスの負荷が大きく変わる。仕様案はだいぶ絞り込まれたように感じるが、身障者向けの情報・構造としたため、まだ多様な（健常者にとっては不要な）情報が入っており、データベースも大きくなってしまふ。
- ・例えば VICS データはプリミティブに作ったためにメンテナンスに困っている。軽くしようとしても、既に広く普及してしまったため変更もままならない状態である。
- ・緯度経度を参照する場合、リンクがぶつ切りになっていると思うが、一連のリンク群を圧縮する等の技術を考えるなどが必要と思う。
- ・保守について、ハードだけでなくソフトの保守も非常に重要である。

【後藤委員】

- ・IT 戦略本部の当初案には本プロジェクトが位置づけられておらず、本部員の三鷹市長の指摘により追記した。
- ・実験報告のなかで、豊田市での実証実験における、属性に応じたバリアフリー経路の案内を携帯電話で行ったことはありがたいことである。
- ・三鷹市では GPS を使った子供見守りサービスの実証実験を行っている。このなかで自律移動支援システムの技術検討に向けた基本理念のうち、「環境が個人を特定しない」というのが考えは重要である。
- ・ひとときに完成形として社会にお見せするのは非常に難しい。段階的に実証実験として進めていくことが重要。
- ・国からは自治体の役割や必要となるコストについて、具体的に示してほしい。

【竹中委員】

- ・本プロジェクトはそもそもユニバーサル社会を目指した取組である。自分は国会議員とともにユニバーサル社会に向けた法制化に向けた取組を進めており、成果を出しつつある。

- ・ 障害者のためにプロジェクトをやるのではなく、みんなのためにやるものが、障害者の社会参加になるものと思っている。
- ・ 国土交通省の活動が隘路に立たされ、携帯電話の普及が飽和状態にあるなかで、ユニバーサル社会の実現が新たな活路になることを期待している。

【長谷川（貞）委員】

- ・ 自律移動支援プロジェクトが具体化しつつあることについてうれしく思う。
- ・ 意見として次の4点をお伝えしたい。
 - 1) 既に広く普及した携帯電話を用いて、個人の属性に応じた情報提供をしていたきたい。
 - 2) GPSなど一般化した技術を用いた費用の安い方法が望ましい。
 - 3) 例えば視覚障害者の就労を支援するため、駅から職場に視覚障害者誘導用ブロックを引くことが考えられるが、これには費用がかかる。情報システムであれば費用は数十分の一に押さえられ、車椅子利用者やお年寄りにとって迷惑な点字ブロックを敷設せずにする。
 - 4) 体表点字の技術が実現段階に入った。もし体表点字を知らなくても、自律移動支援プロジェクトで提供する歩行経路の逸脱や信号現示などの注意喚起には用いることができると考える。

【長谷川（洋）委員】

- ・ 平成21年度の実現化が明言化されたことは非常に喜ばしいこと。関係各位にお礼を申し上げたい。
- ・ 聴覚障害者は移動に向け問題はないと考えられがちであるが、参考資料Bに聴覚障害者に向けたサービスが示されたこともうれしく思う。
- ・ 実用化に向けて問題はあるかと思うが、システムの側だけではなく障害者としても（システムに行動をあわせる）対応を考えていくことも必要であると考えている。

【福島委員】

- ・ 本プロジェクトが対峙する問題は大きくかつ難しいが、着実に進んでいるという感想を持っている。関係各位にお礼を申し上げる。
- ・ 平成21年度は国土交通省として、特に予算面について、どの程度コミットするつもりなのか質問したい。
- ・ 基盤を国が作り、サービスを民間が提供する枠組みは大枠ではこれでよいと思うが、（障害者対応など）特別なケースまで民間に依拠することは難しい。プラットフォームを造れば国の役割は終わりではなく、継続的な関与が必要。
- ・ 利便性だけではなく、安全安心な移動の提供に向けた視点も必要。特に大規模災害

が発生した際の安全安心な移動は全人的な問題であり、国の関与は必要不可欠なものである。

(鈴木政策統括官)

- ・まず 20 年度の実験が実りあるものになるよう全力を尽くしていきたい。
- ・21 年度以降については、ユニバーサルな「いつでも、どこでも、だれでも」といった目的に沿って、どんなことができるのか視野を広げて検討していきたい。

【坂村委員長】

- ・今年度の活動の総括より着実に前進していることを感じ、各委員からも着実に進んでいるという感想をいただき、ありがたく思う。
- ・このプロジェクトには、産官学民の連携、情報がオープンになること、関係者間のインターフェースが重要になると思っている。それぞれの役割がベストエフォートの考え方で力を出し合うことで実現するものである。
- ・インフラは国・地方自治体、端末は民間の役割が重要。今の携帯電話は発展途上でビジネスモデルも世界標準とは異なっている。銀座の実験で行ったような動画配信を行うとコストがかかること、端末の開発がオープンでないことなど、課題がたくさんある。総務省とは SIM ロックを外して携帯端末の製造をオープンにする取組を進めており、これにより実現の一助となるものと考えている。
- ・コンテンツについては、民間が出し続けることも、国・自治体が出し続けるのも困難。地域住民や NPO の参画が必要。
- ・このようにプロジェクトの推進に向け、産官学民は今後ともよく連携していく必要がある。

【鈴木政策統括官】

- ・本日頂いたご意見を踏まえ、平成 20 年度は各地で実証実験を進め、今後の定常的なサービスに資するよう目指していきたい。
- ・定常的サービスの提供に向けては多くの課題が残っている。サービスの提供には関係者の連携が不可欠であり、今後とも皆様のご協力をお願いしたい。
- ・また、福田総理の施政方針演説にもあったとおり、常に国民の立場に立ち、ニーズを踏まえ利用者本位でプロジェクトを進めたいと考えている。皆様には利用者の視点からのご意見、ご指導も賜りたい。
- ・この 1 年間、ご協力ありがとうございました。我々としても全力を挙げてプロジェクトを進めていきたいと思っておりますので、今後ともよろしく申し上げます。

～ 以 上 ～